

木津川市プロデュースプロジェクト ～中学生と考えるまちづくり

春・秋連続学期

京田辺校地開講科目

1. 目的・概要

the purpose and an outline

毎日を過ごす大切な場所だからこそ、より関心を持ち誇りに思ってもらいたい。私たちは木津川市民である中学生とともに、木津川市の魅力発信や課題解決について考え「プロデュース」活動を行ってきました。

私たちは「思いを形にして変化を生み出し、周りの人によかったと思ってもらえること」をプロデュースとらえて活動をスタートさせました。木津川市立の5中学校と連携し、各校中学2年生5～7人名のチームには、それぞれ大学生1～2名が担当となってリードし、まちづくりのアイデア出しから実践までの一連の活動に取り組みました。

各校の活動では、大学生が活動のプランシートを作成し、毎回の活動が円滑に進むよう工夫しました。また中学校の先生や関係者との打ち合わせを重ね、設定した目標の達成に向けて計画的に活動が進むように方向性の修正などを行いました。

プロデュース活動をより社会に広めるため、私たち大学生チームが「イオンモール高の原」での最終成果報告会を企画、プロデュースし、中学生と大学生によるプレゼンテーションとポスターセッションを行いました。



annual schedule

2013年 4月 24日	中学校の先生方とのミーティング
5月 8日	中学生との顔合わせ(5中学校合同) 各校活動スタート
6月～7月	各校活動(テーマ設定、企画案づくり)
8月	各校活動(役割分担、制作活動等)
22日	中間報告会(5中学校合同活動)
9月～10月	各校活動(役割分担、制作活動等) 各校での発表(発表内容の検討、練習、学習発表会等での活動報告)
11月	各校活動(イベント準備等)
24日	木の津まつり参加(スタンプラリー実施・菓子販売、ブース展示)
12月	各校活動(活動のふりかえり、発表練習等)
21日	最終成果発表会(イオンモール高の原にて)
2014年 1月	アンケート分析 活動まとめ



2. 成果達成度

the achievement degree

【中学生との活動】

私たちが設定した各校活動の目標は「具体的に活動の結果をまわりに広め、よかったと思ってもらう(=社会化する)ところまで行くこと」でした。そのため、第三者による評価を受け入れるところまでを視野に入れ、実現可能性も考慮したテーマ設定をして活動しました。その結果、すべてのチームがそれぞれ各校の特徴を活かした成果物を完成させ、目標を達成することができました。

○木津中学校

オリジナルリサイクルボックスでまち美化促進

- 中学校近くのスーパーに設置、3ヶ月で10,000個のペットボトルキャップを回収
- キャップ回収活動は生徒会で継続することが決定

○木津第二中学校

地元のお祭りの広報企画に参加し、まちのPR活動を行う

- 木の津まつり(木津川市木津町商工会主催)のポスター作成
- まちの良さを知ってもらうためのクイズを盛り込んだスタンプラリー企画実施

○木津南中学校

地元の特産物「タケノコ」をお菓子にして広める

- 地元の菓子店の協力を得てお菓子を商品化、木の津まつりにて300個限定販売

○泉川中学校

地元の歴史スポットを小学生にマンガで紹介

- 現場取材や登場人物・ストーリーの考案
- オリジナルのカラー刷り手描きマンガ小冊子を制作

○山城中学校

山城の自然を守るため、動画を作成しゴミ削減をアピール

- 3本の動画を作成、最終成果報告会(イオンモール高の原)での放映
- 中学校ホームページでの公開



12月には、活動の集大成として、市内にある「イオンモール高の原」にて5中学校合同の最終成果発表会を行いました。多くの方々に足を止めていただき、聞いてもらうことができました。本プロジェクトは約8か月という短期間の活動なので、継続性や地域への浸透は難しい問題だと思います。しかし、市民ひとりひとりにまちを良くしようという意識が芽生えたら、木津川市はさらに市民から愛される素敵なまちになるはずです。今回、私たちが中学生と取り組んだプロジェクトをきっかけに、市民の方々が木津川市に関心を持っていただければ、また中学生自身の市民としてのさらなる意識向上につながれば、これほど嬉しいことはありません。

【プロデュースの観点から】

今回の5校の活動経過と成果を改めて「プロデュース」という観点で分析し、プロデュースにおいての重要なポイントをいくつか見出すことができました。

まずひとつは「実現環境を整える」ことで「社会化」がうまくいくということです。プロジェクトを具体的に動かす前に、自分たちの考えを第三者に対して伝え、意見を聞くチャンスを得ることができていたところは、最終段階の社会化がうまくいく傾向にあることがわかりました。計画を立てるための情報や条件、素材がしっかりそろっていることの重要性を改めて考えさせられました。しっかりと取組の実現に必要な人を見つけ、ストーリーを語って協力してもらうことができると、メンバー自身も納得する形で活動を進めることができていました。特に学外の専門家に協力を求める場合は、プロジェクトの意図や内容を理解してもらい、協力して欲しい具体的な内容を伝えることだけでなく、協力に対して明確なご返答をいただけるよう、相手の方の立場やメリット・デメリットも含めてよく考える必要性を実感しました。

もう一点は「構想」が常に頭の中にあれば「目的」を見失わないことです。目的を達成するために行うプロジェクトのほが、活動（手段）が目的そのものになってしまっていることがありました。何かを広めるために行っている媒体制作が、次第に広める内容ではなく媒体を作ること自体が目的であるかようになってしまう、というケースです。テーマ設定をする段階で、自分たちの活動の目的を何度も確認し、取り組む内容を定めるための議論に多くの時間を割いたチームは、活動に対する目的意識を維持することができているとともに、プロジェクトの途中でメンバー間で活動を振り返る機会を定期的に設け、本来の目的と手段を再確認する作業をしていました。常に取組の目的を意識すること、取組の全体像を見渡すことの大切さを感じました。



3. プロジェクトを通じて

through a project

自分たちの思いや活動を人に伝えることの難しさを知りました。どの場面においても、伝えたいことは表面的ではなく、自分自身が深く理解することによって、はじめて言葉で表現できると実感しました。理解できるだろうという思い込みから、うまく説明が伝わらず、活動が予定通り進まないこともありました。特に、中学生に説明する際は言葉づかいに工夫が必要であるなど、大変勉強になりました。

また5つのプロジェクトが同時進行する中で情報共有が不足しがちになり、スケジュールリングに影響することがありました。それぞれの反省をうまく応用することができれば、さらに質の高い活動になったと思います。どんなに忙しくても、基本的な部分を徹底することが重要だと学びました。

【編集後記】

改めて報告書を作成していると、書きたいことが山程あり困りました。それだけ、このプロジェクトのために努力し、学び、たくさんの時間をかけたと思います。木津川市の方々をはじめ、本当にたくさんの方に支えられて活動をしました。貴重な経験をありがとうございました。

【プロジェクトメンバー】

原 奈緒美(文化情報2) 是則 昌平(理工3) 森田 準基(理工3) 森 誠三郎(理工4) 中村 拓人(生命医科3) 楊 政昊(生命医科3)
上野 洋(生命医科3) 今入 康友(TA)